

復興に活躍する 技術士



日本技術士会経営工学部門 林謙三氏

三陸の“なりわいの再生”に協力

経営工学部門の有志で、持続可能で豊かな社会を目指す「21世紀の経営工学ビジョン」づくりに取り組んでいた。基本コンセプトは循環型社会、知足（足るを知る）社会だ。

その最中に東日本大震災が起きた。そこで「われわれにできることは何か」「実践しようではないか」ということになった。

現場、現物、現実の3現主義に徹することは経営工学にとって基本中の基本だ。昨年8月か

ら数回にわたり、遠野市（岩手県）を拠点に、被災地である陸前高田市から山田町までの3市2町を視察し、行政や商工会議所・商工会と面談した。被災状況と復旧に向けた取り組みは、湾の形状と市町の庁舎が被災しているか否かで、その差が歴然としていた。われわれにできることは、岩手県の復興計画に示されている「なりわいの再生」にあると気付いた。①「三陸ブランド」によるなりわいの創造



②若人が「U & Iターン」できる魅力あるふるさとづくりの2大目標を掲げ、それらの道筋ができるまで地道に協力しつづけることにした。

岩手県復興局との話し合い。地道な活動を一つ一つ積み重ね、広げていくことで「なりわいの再生」という夢の実現を目指している

昨年12月には経営工学部会にワーキンググループを設置し、ほぼ2週間ごとにミーティングを開くとともに、現地のパートナーである岩手大学、釜石・大

槌地域産業育成センターと協議を重ね、2012年度の活動計画を設定した。それは「人材育成」「モノづくり」「水産業再生」への協力だ。

東京と盛岡、そして釜石。いつも頭をよぎるのは、現地との距離であり、現地と寄り添いながら支援できないことのもどかしさである。幸いにも岩手大学が釜石にサテライトオフィスを設けており、そこを間借りすることができた。念願である現地密着への環境が整いつつある。

安岡正篤は「一燈照隅、万燈照国」と説いている。われわれのモットーは「Dreams come true」だ。